

「悩みが喜びに、嘆きが祭りに」

エステル記 9 章 13-22 節

ペルシャ帝国の王様に次ぐ実権を持った大臣ハマン。そのハマンの言うことを聞かなかったエステル親戚モルデカイ。ハマンは何とかしてモルデカイを懲らしめようと思い、ユダヤ民族全てを滅ぼす計画を立てたのです。その計画を知ったモルデカイは、王妃エステルに頼みました。エステル、お前から王様にユダヤ人を救うよう伝えてくれと。モルデカイとエステルの活躍により、事態は逆転しました。ハマンの計画は王の知るところとなり、ハマンは木に処刑されてしまいます。そして、ハマンの地位をモルデカイが、ハマンの財産をエステルが嗣ぐことになったのです。

しかし、王の勅令は決して取り消すことができないという決まりがありました。このため、ハマンが死んでも「12 月 13 日のユダヤ人撲滅令」は有効なのです。いよいよその問題の 12 月 13 日、ハマンがプルというくじで決めたユダヤ人撲滅作戦の実行の日。ハマンの息子たちは、仇討ちを果たそうと、ユダヤ人狩りをしようとしたのです。とはいえ、諸州の高官、総督、地方長官などを味方につけてしまったユダヤ人にかなうはずもありません。結局、ハマンの 10 人の息子たちもすべて捕らえられ、殺され、木にかけられました。そして、ユダヤ人の仇敵 7 万 5 千人が戦死したとされています。

さて、モルデカイは、このユダヤ人の勝利の日を「プリムの祭り」として大切に守り、後々まで忘れないようという命令を題しました。このプリムの祭りは今日に至るまでユダヤ人によって守られています。ユダヤ人たちの歴史、このエステル記 9 章から学ぶメッセージを今日は、大きく 4 つ覚えておいてください。

① 逆転勝利(1 節、22 節)

神様を信じる生活が、そうでない生活に比べて悩みが少ないということはありません。むしろ、神様を信じていた方が、悩みが多いのではないのでしょうか。しかし、その事態が逆転する日が必ず来る。どんなに悩みの多い人生を生きていても、神様を信じる道を歩み続けた人は必ず、神様によって勝利の冠が与えられるのです。

② クリスチャンの戦い方(10 節、15 節、16 節)

「しかし持ち物には手をつけなかった」と繰り返されています。つまり、この世の富が目的の戦いではなかったということです。霊的な実りを受ける勝利とは、敵から何かをしてもらうような勝利ではなく、神様から何かをいただけるような勝利なのです。

③ 喜びを分かち合う(22 節)

12 月 14 日は、敵がいなくなった安らぎの日、悩みが喜びに変わり、嘆きが祭りに変わった日として記念されることになったとされています。そして、その喜びの日に、互いに贈り物を交換したり、貧しい人に贈り物をしました。贈り物をする、つまり喜びを分かち合うということです。

④ 忘れない(27 節)

この救いの日は、「怠りなく祝うこと」が決められました。そして、世代を越えて「失せてはならないもの」と言われています。そのために、エステルとモルデカイはすべての権限をもって文書を作ったということです。

プリムとはプル(くじ)の複数形、くじは 1 度だけでしたが、祝いの日が 2 日に亘るのでプリムとなったとのこと。思えばエステルが死を覚悟して王の前に進み出た決断が、ユダヤ人の嘆きを祭りに変えました。願わくは、エステルのように勇気ある決断を試み前に進み出て、主の愛が多くの人々に注がれるために、主のご用をさせていただく者になりたいと思います。もう一つ注意したいことは、祭りだけではなく、文書によってもそれが伝えられたということです。それが聖書です。だから、救いがわからなくなったら聖書を読みなさい、ということになります。